

老SLの騒音

我々に対して厚意のあった厚生省の課長や、献血事業団の山口専務理事から、声静かに、保存血から手を引きなさい、そすれうば血漿分画製剤の事業は生き残れる——という忠告がありました。それを受けて1967年から1969年へかけ、小倉、静岡、東京、大阪、名古屋、京都と、ひとつずつ銀行血の廃業。既に発行されていた預血証書という債務をどうするか、私は各地の日赤血液センターに、ひたすら平身低頭、低姿勢ととるのほかはありませんでした。とにかくパチンコ屋にならずに済みました。

この大嵐の余波はいまだに残っていて、太平洋波静かというに至っていません。

タイムリーな増資

会社の資本増加はいつもタイムリーに、営業量の成長と合わせて、ムリがなく行なわれてきました。増資と、その前後の発売品目を対比してもそれが判りましょう。

1955	75(百万)円	——仙台、高松支店、東京プラント、都島工場。
1956	150(〃)円	——札幌、京都に支店、京都プラント、都島工場に血漿工場。
1958	300(〃)円	——小倉プラント、都島に研究室を新設。
1960	600(〃)円	——コンドロイチン、ヘマトミン、アボレス、マック、カシワドールの発売。プラスマネート輸入開始。
1962	1,000(〃)円	——ネフラージン、マクロデックスD、カッターと技術援助契約、分画製剤。
1969	1,500(〃)円	——ウロキナーゼ、カルベタペンテン、テタノブリン、AHF、イントラリピッド等。
1972	1,700(〃)円	(時価発行増資)——→淀川工場の拡張。
1973	1,870(〃)円	(無償増資)

これらの、慎重でありながら且勇氣のあった増資は小林会長の指導下、経理担当重役の勇断で行なわれました。最後の増資は時価発行公募で行なわれ、その資金が淀川工場の第3棟と品質管理部の施設になったわけですが、1976年7月から強制に入るGMPの完成に、遅過ぎず、早過ぎず、見事にオンタイムに間に合った次第で、これは一に大田専務の先見と英断によるものです。

ムダのなかった淀川工場の成育

淀川工場第1棟の建築は1968年に完工、丁度輸液の増産開始とイントラリピッドの製造開始に間に合いました。

第3棟と品質管理部とは1969年着工、今年完工。ウロキナーゼの増産に丁度間に合って、その品切れを起さないで間に合いました。分画製剤の仕上げ工程とともに製剤工場が完成します。折しもGMPの制定が行なわれ、どの製薬会社も苦心していますところ、当社ではこの完工によってGMP適合工場ができるわけで、そのための設備資金は一部は開発銀行の融資によるが、主力は1973年の時価発行増資による資金によるものです。すべての進行が、timely and synchronized で行なわれました。有難いことです。

概 観

過ぐる25年を振り返って、良かったと思う会社の性格を一言でつくすと次のようになります。

- (1) 内外の医学の最高知識との接触が良く、需要の先見が良くできたこと。老舗にあり勝ちの固執がなく柔軟に、穴をすり抜けるウナギのように柔かく、素早い取り込みと対処ができたこと。
- (2) タケダ、三共、シオノギというような高峰のそびえる中を、それらと競争しない専門的な特殊分野の医薬品を選んで、谷間の小径をたどって登り続けて来たこと。
- (3) 他社のような事務系偏重とか技術系偏重が全くなくて、両者バランスをとり、一体となって互譲しながらの意志決定が行なわれたと。
- (4) 欧米の科学書を不断に勉強して新知識をとり入れ、医学界に輸入教科書を提供するような姿勢でリードして来たこと。

よその会社について業界紙や経済雑誌が一般論として批判的に書いていることについて、うちの会社での現状を対比すると次のようになります。

- (1) 製造と販売が足並みが揃はないのが困る。——うちでは販売＝生産量の予測は営業部門の責任で決定することを制度化し、毎3月の生産計画を樹てる、生産は営業部の先見に従うこととなっていて両者の背反はない。
- (2) 研究所の研究成果が製品や製造に連がっていない——うちでは研究

著者略歴

1906年 生(京都府丹波の国)
1931年 京都帝国大学医学部卒
1950年 株式会社日本ブラッドバンク取締役
1978年 株式会社**三ドリ十字**取締役会長

老 S L の 騒 音

1980年11月20日発行

非 売 品

筆 者 内 藤 良 一

発行者 株式会社 **三ドリ十字**

印刷製本 大和凸版工芸印刷株式会社

